

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 平田 雅

【所属】（助成決定時）慶応義塾大学大学院 後期博士課程

【研究題目】

「現代美術アワードの発展的展開に向けて～欧米現代美術アワード発展過程における政府・企業・美術館・資金支援団体共同プロジェクトに関する考察」

【研究の目的】

近年、経済不況の影響により、莫大な寄付を財政基盤とする米国美術館においても企画の規模縮小や人員削減等、事業面だけでなく経営面についても影響が現れている。こうした背景の下、美術館は、経済状況に左右されずに事業継続を行うための外部資金の調達、新たな事業構造の検討が必要とされていると考える。そこで本研究では、国内外で開催されている現代美術アワードを歴史的に検証し、その発展の過程を明らかにすることにより、現代美術アワードの継続的な活動、ひいては国内企業の文化支援活動全体に資するものにしたいたいと考えた。今後国内現代美術アワードをより推進するためには、先進事例であり、古くから歴史のある海外の現代美術アワードの仕組みや協力機関との関係、プログラム発展の過程について学術的アプローチにより調査分析することは、今後の国内企業の文化活動、文化行政、文化関係機関のみならず、文化経済学的にも学術的価値が高いと推察する。したがって本研究では、美術館・芸術家・資金援助団体・社会との関わり方の変遷と、美術館と外部組織との共同プロジェクトの持つ現代的特質の抽出を試みた。

【研究の内容・方法】

前述の問題意識から、本研究では、主に美術賞と外部組織との連携関係を社会的観点から評価することを目指した。そこで本研究では、まず、現代美術アワードの実績が豊富である米国での現代美術アワードの発展過程、主催者遍歴、経済状況、プログラム変遷等の歴史的検証を試み、米国現代美術アワードの継続性に重要な要素の抽出を試みた。ここでは主に現地での調査、文献調査による検証を採用した。次に、国内事例の調査結果について、同様の主軸により、分析を重ねることで、海外現代美術アワードと、国内現代美術アワードの間に見られる発展過程の相違や、現代美術に対する支援方法の違いを考察した。

調査対象として、古くから若手現代美術アワードを数多く手がけている米国のグッゲンハイム美術館及び同館アーカイブ（グッゲンハイムミュージアム・ライブラリー・アンド・アーカイブ）を選定し、同館の現地調査を試みた。1950年から2010年4月までのソロモン・R・グッゲンハイム・ライブラリー＆アーカイブ所蔵の財団発表資料を主な調査対象とし、これらの期間に開催されたグッゲンハイム美術館における初期の現代美術アワード「グッゲンハイム国際美術賞（1956-1971）」から現在まで継続している「ヒューゴ・ボス・プライズ（1996-継続中）」ならびに2000年代以降の「ザ・ファースト・アニュアル・アート・アワード（2009-継続中）」までにおける、賞のアウトライン、提携機関先、開催の目的等を概観することにより、美術館とそれを取り巻く関係団体との共同プロジェクトの変遷にて対する考察を試みた。

【結論・考察】

上記調査の結果、グッゲンハイム美術館における現代美術アワードには、大別すると4つの歴史的変遷が確認された。すなわち、第1期（1956-1970）における「グッゲンハイム国際美術賞」では、東西冷戦下の国際社会を反映した国際文化交流としての機能を有し、第2期（1971-1986）以降の米国経済不況時には館長トマス・メッサー主導の下、若手芸術家の振興とともに、企業からの寄付を利用した同時代作家のコレクション拡充という重要な役割を担っていた。さらに第3期（1996-）以降は、「ヒューゴ・ボス・プライズ」をはじめとした異業種やマス・コミュニケーションとの協働プログラム開催により、現代美術アワードをより一般社会に開かれた存在に押し広げた。そして、第4期（2000年以降）においてこの傾向はより強化され、現代美術アワードの社会化、すなわち、民衆が賞の審査へ参加するプラットフォームが形成された。第4期に見られるこの特徴は、現在世界中に散在する国際美術アワードの大きな傾向の一つに掲げられている。

このように、現代美術アワードは、様々な状況・用途に応じ柔軟に変化可能な手法であり、それが、グッゲンハイム美術館の時代に応じた姿勢と密接に関わりながら、他機関との共同プロジェクトとして発展してきたことが確認され

た。同時に、グッゲンハイムで共通した国際的な現代美術アワードの受賞作家が、その後の現代美術史の中で評価される存在となっている点も忘れてはならない。さまざまな業種・団体との協力を構築しながらも、芸術的到達を実現している本事例は、今後の日本国内の美術館にとっても大変意義深く、重要な示唆を与える事例であると考え